

## 幼児期の音楽カリキュラムへの提言

——保育における音楽の有用性——

中西 智子

### Study of Cariculum for Music in Infancy

Satoko NAKANISHI

#### はじめに

音楽は他の芸術と同様に、生活全体への深い感応から生まれ始める。幼稚園・保育所での幼児を観察していると、幼児が思いの丈をこめて話す話しことば、身体の所作、落書のような絵、ムチャクチャ歌のような音楽など、そのどれもが幼児のイメージーションに迫る感動を移入した表現であるように感じられる。幼児の直感と技術と創造力から発せられた自然発生的な表現は、幼児の精神的な発達過程と社会的な環境との密接な関わりをもっている。

音楽は表現手段としてある程度だれにでも使えるものである。しかし、幼児にとっては、絵を描くときに必然的な音楽としての音楽の表現であったり、お人形やミニ・カーで遊んでいる時などに心に浮かんだことばが歌のようになった音楽の表現であったりなどの場合が多く認められる。このように、音楽の境界を越えた、音楽と何かが合わさった時に始めて、幼児にとって音楽が表現手段となることが通常である。

音楽教育では単に音楽を教科として把えるのではなく、特に幼児期の音楽教育では教科の境界線を取り去って、生活文化のなかにある音楽として意識的な教育を考察することが必要であろう。

#### I 音楽カリキュラムの基礎的要素

##### 1 幼稚園・保育所における音楽教育の位置づけ

幼児期の音楽教育という概念のなかで、幼児にとっての音楽とは、生活必需品のような存在として考えてよいのではないだろうか。幼児が家庭や幼稚園・保育所の生活のなかで慣れ親しんだ文化のなかの一つの音楽は、生活に必要なものとして、知らず知らずのうちに身にそまり、無くては不自由なものとなっていく。

幼稚園・保育所での音楽教育の効果的な指導とは、幼児が音楽的生活経験から音楽を知識として深化することのできる指導といえよう。幼児が音楽を知識として深化していくのは、その知識の多くが幼児の生活のなかで相互に関係しあい、寄りかかりながら成り立つときに考えられる。

一つ一つの知識は他の知識と関連し、依存することによって、それぞれの知識が系統立った知識として身につき、会得することが可能になるだろう。

このように、知識というもののすべてが生活経験から始まり、生活経験から身につけて得た知識によって知的な能力が育ち、知的な能力を利用することによって心の豊かさへと広がっていくと考えられよう。

経験にもとづく膨大な知識は、理解と経験の広さが問題となる。日常の生活のなかから得た知識は、理解と経験によって知的要素や勝れた判断力の基となり、物事を正しく見分ける力となっていくであろう。

幼稚園・保育所の日常の保育のなかで幼児に音楽が有用であるのは、音楽によって幼児の内なるものを外に押し出すという、創造的な芸術としての役割をもつときではないだろうか。生活必需品のような存在としての音楽を、幼稚園・保育所で学習することによって、幼児が表現手段としてある程度使えるようになることに、音楽教育の位置付けがあると考えられる。

幼児が音楽を自己表現の一つの手段として使えるような知的な能力を促進させるのは、幼児の好奇心や向上心であり、幼児をとりまく社会や文化の影響力であろう。そして、幼児自身が自分の可能性について目ざめ、自分の考えを表現しようとするその過程が、幼児に音楽の認識を深化させていくと考えられる。

同時性や一過性の性質であり、抽象的に推敲せねばならない音楽は、直感に拠るところが非常に多い。それゆえに、音楽を理解し経験を広げていくには、自分を取り巻く周囲の状況について敏感にかかわりながら行動し、想像し、音楽の周辺をも聴くことができる力を養う必要がある。人は生活している文化圏のなかで絶えず新しい情報を取り入れながら、知識を修正しながら生きている。幼稚園・保育所は教育的な意図のもとで大量に新しい情報を与える場であるが、同時に、幼児が獲得した知識を使う機会、行動する機会を能動的に発揮できる場でもある。そのような場を得ることによって、幼児は長い時間をかけて多くの知識を会得して、人間としての成長を確かなものへとしていくのである。

幼児が幼稚園・保育所で会得した多くの能力の一つに音楽的な能力がある。幼児が音楽を表現手段として使う機会、行動する機会を日常保育の場で設定することから、幼児の音楽的な能力の前進が期待できるものと考えられる。

## 2 音楽カリキュラムへの筋道

音楽の本質は表現する人とそれを視聴して受ける人が同時に同じ場所で向きあうことにあるだろう。目利きと目利かずという言葉があるように、受ける人の想像力に訴える音楽は、受ける人の目利きの能力によって、表現する人のできばえにかかってくるのが大きい。すなわち、表現する人と受ける人の二者の相応が大事となるのである。むろん、二者の相応を条件としてその前にあるのは、音楽である。音楽を入れた三者の相応において、音楽教育の考察が成り立つものである。

幼児が音楽を使って表現する方法はいろいろあるが、そこには必ず何がしかの技術が伴っている。大人から見れば稚拙な技術であっても、その技術を通して表現する能力は、幼児が慣れ親しんだ生活文化のなかで学習した知的な能力の成果の表われである。幼児が表現した事柄には幼児の感情移入があり、幼児が音楽的な直感と技術で表現した事柄は、自分へ、もしくは他者へとコミュニケーションするものである。受ける側は想像力豊かに感応し、観察し、聴くことで表現する人と受ける人とのコミュニケーションが成立する。

このように音楽の本質の理解のうえに、音楽カリキュラムという音楽教育の過程を考える基

盤にあるのは、幼児の耳をひらく教育であり、幼児の心をひらく教育であろう。

音楽についての考え方は、時代や場所によって変わるものであり、今日、我々が聴くことのできる音楽にも多種多様な音楽がある。このような事実から、公教育の音楽教育の立場で第一に始めることは、生活文化のなかにある音楽についてわかろうとする耳や心を育てることと考える。

小泉文夫氏がいうように、音楽は何らかの形で人と一緒にいたいと思ひ、人とコミュニケーションするために自分から自分へ、あるいは自分から人へと繋がり、そして人間関係を深めていくものである<sup>1)</sup>。コミュニケーションに果たす役割は、心で感じる部分が他者を理解し、尊敬することではないだろうか。このことは、音楽の領域では音や音楽に意識的に努力をすることに他ならない。そして、音や音楽を共有して繋がった仲間同志のやりとりの見られる日常生活場面こそが、幼稚園・保育所の望ましい音楽教育現場と考える。

このように、幼児期の音楽カリキュラムを考えるには、表現することと、表現された事柄を受け取ることを一体とした音楽的な能力を伸ばす、という観点の教育が大切と考える。

### 3 音楽カリキュラムのねらい

社会的に形成される文化は、人間が成長するにつれて伝承としてうけついでゆくものである。子どものときからそういう伝承が頭の中につまこまれ、しこまれている、これが文化である。おなじ社会の中で育った人間はほぼちかい文化をもっている<sup>2)</sup>。三善晃氏は、「民謡にしても、日本の気候、季節のなかで葉づれの音も川のせせらぎも日の光りもあって、初めて民謡となる。向う（外国）へ持って行って舞台でやってもそれはわからない。……」<sup>3)</sup>と述べ、さらに、文化は知識としてではなく思想として伝わるものであると述べている。

たしかに、今日の我々は日本人の生活様式が欧米化されたとはいえ、生活のなかに西洋音楽が一般的になったとはいえ、日本人の情緒的、情動的な側面が真の日本人としての原点で生活を支えていることは確かと思われる。例えば、人間の生存にとって最も有力なコミュニケーションの手段である言葉について考えてみたい。日本人は言葉を厳密な意味での意志や考えの伝達には用いずに、むしろ、婉曲な表現や言葉のあやを情緒的に用いる伝統がある。

言葉の用い方の伝統と共通して、幼児期の音楽教育でも、幼児を取り巻く周囲の状況で音の響きをどのように心のなかへ受け入れ、音楽的表象をつくっていくか、という日本人の音楽の周辺を考える必要がある。このような考え方から音楽カリキュラムの構成を設定すべきではないだろうか。

日本に生まれて日本で育った日本人で、日本のわらべ唄は難しいから歌えないと思う人がいるだろうか。わらべ唄を歌えるということは、幼い時から特別の訓練を必要とせずとも、仲間や周囲の大人とのコミュニケーションを行いながら、情動的体験を共有することによって獲得した音楽的能力の一部なのである。情動的体験を共有して会得した音楽ならば、その音楽の高度なレベルを目ざさない限りは、誰でもが難しい、わからないと拒むことは無いであろう。音楽を難しい、わからないと思う人は、音楽をいわゆるクラシック音楽として扱った人達の中に生じた思い違いによるものではないだろうか。

幼稚園・保育所での音楽的な活動を通して、幼児が音楽を難しい、わからないと思うことはまず無いだろう。なぜなら、幼児へと用意される音楽にはことばが伴ったり、動き（手遊びなどの運動的なもの）が伴って音楽の内容的（リズム、速さ、音の高低、強弱、始まり方や終り

方の音楽の形式など) な理解ができやすいからである。あるいは、よく慣れ親しむ程に繰り返される旋律パターンがふくまれている、耳慣れた音の響きがふくまれているからであろう。

幼児にとって音楽は楽しいか、楽しくないかで音楽を受け入れているように思われる。幼児が楽しいと思う音楽は、幼児なりにわかると感じることができるからであり、幼児が楽しくない音楽と思うのは、何らかの技術を要求されてそれに応じきれずに拒否する気持ちが生じるからと考えられる。

幼稚園・保育所へ入園して来た幼児には、個人的な音楽経験の差違が認められる。しかし、ことばを使い、身体を動かし、音の響きを聴くことはどの子にでもできることである。園での共同生活を充分楽しみながら、さまざまな体験を通して音楽の内容を学習していく過程では、幼児みずから積極的にことばを使い、身体を動かし、音の響きを聴くというような行動することによって、おのずと音楽への理解を深めていくことになる。音楽的な能力には個人差が有ることはいうまでもないが、一人一人の幼児は活発に内なるものを表現する人であり、ある時は、仲間の表現を受けることのできる人になって、他者をも認めることのできる人に育っていく。

音楽のカリキュラムのねらいとは、ことばを使い、動き、音や音楽の響きを聴きながら音楽の内容がわかり、楽しめるような人へと育てていくための計画である。

## Ⅱ 音楽カリキュラムの組み立て方

それぞれの幼稚園・保育所では、どの子にも区別なしに一律の音楽を教えることになる。しかし、そこで使用する音楽が音楽教育の次元からの選曲であれば、音楽の何を教えるために使用する曲かを明確にすることが必要であろう。幼児の耳をひらき心をひらくという音楽教育のねらいにそって、音楽の基礎的な内容をどの子にも容易にわかり、楽しめるような音楽カリキュラムを考えてみたい。

### 1 音楽理解のための音楽

幼稚園では幼稚園教育要領、保育所では保育所保育指針に、保育内容として望ましい幼児の活動のあり方が明らかにされている。音楽教育に関しては、幼稚園教育要領では「音楽リズム」、保育所保育指針では「音楽」として、音楽に関する保育内容の活動が示されている。そして、幼稚園教育要領と保育所保育指針に述べられている音楽の活動を、実際的な教材テキストとしてまとめた出版物が各社から刊行されている。

教材テキストは、今日、幼稚園や保育所で音楽を使う活動として、歌うこと、楽器などで音を出すこと、音楽にあわせて身体を動かすこと、音楽を聴くことなどの保育に利用され、また、劇遊び、紙芝居、ペープ・サートなどの指導時にも利用されている。このように幅広く利用されている教材テキストにある音楽は、日本の子どものためにと作曲された音楽、外国の曲に日本語の歌詞を付けた音楽、名曲といわれている西洋音楽などが中心であり、次に、わらべ唄のような日本の子どもの遊び歌が西洋音楽の五線譜によって載せられている。幼児教育の教育現場において、幼児期の音楽教材として曲を選択する拠り所となっているのは、小学校から始まる義務教育での音楽の扱え方であろうと考えられる。

幼稚園教育要領や保育所保育指針では幼児の音楽教育についての基本的理念を記すだけであり、これを受けて具体的な教材として国内、国外の曲を小学校教育との接続を考慮して編集し

た教材テキストが多数出版されているのが現状である。これらテキストのいずれを使うか、どの曲を教材とするかの選択は、指導者の音楽的センスと好みに任されることであろうが、その際に考慮に入れるべき点は、音楽を構成する音楽の要素についての概念を把握しておくことである。

## 2 音楽の要素の概念

現在の生活文化にはさまざまな種類の音楽があり、それぞれの音楽が人々の好みによって生活のなかに受け入れられている。このように、一般的に音楽と認められている音楽には、一応の音楽の要素として、①リズム・間、②速度、③音の高低、④音色、⑤強弱、⑥曲のまとまりとしての形式、の6種を音楽の要素の概念として取りあげることができる。

音楽の要素を音楽を構成する要因として考え、この考え方で音楽教育のメソッドを作成したのが、例えば、エミール・ジャック・ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze 1865-1950) によって創案されたリトミック (Rhythmik) であり、カール・オルフ (Carl Orff 1875-1982) の《シュール=ベルク》(Schul-werk) や《子どものための音楽》(Musik für kinder) である。

ダルクローズやオルフのメソッドは、西洋音楽を使った西洋の子どものためのものである。西洋の子どもにとって西洋の音楽は生活習慣や思想などの生活文化のなかで知らず知らずのうちにわかり、楽しむことができるような、身近な音楽であろう。今日、日本の子どものための音楽教育のメソッドとして、幼稚園・保育所で用いるべきものを探し出すことはできない。ただし、前出した6つの音楽の要素についての概念で、今日の日本の子どもの生活文化にある音楽を構造化することは可能である。

そこで、特別に障害をもたない子であれば、ことばを使い、身体を動かし、音を聴くという行動をしながら、どの子でも個人個人の音楽的能力を豊かに広げていけるような、耳をひらき心をひらくための音楽カリキュラムの実際を考えてみたい。

## 3 音楽カリキュラムの実際例

### 3-1 ことばを使う活動から歌へ

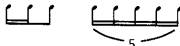
幼児が生活のなかで日常的に使う話しことばには、音の高低、リズムと間が音声には必然的にそなわっている。さらに、うれしい気持、淋しい気持、ゆったりした気持、あわてた気持などのさまざまな感情が込められていて、速度や強弱によって表情豊かな話し声となっている。そして、その時々話し声には時には母親の真似をした作り声であったり、甘えたような鼻声であったりと、時に応じた声の音色、調子がある。


目覚めてから家族の人とかわす会話の始めは「おはよう」とか「おはようございます」であろう。そして、幼稚園・保育所への道すがらに知った人に会ったり、登園してからのあいさつも「おはよう」とか「おはようございます」から会話が始まる。親や親しい大人は朝のあいさつのことばの調子から、子どもの身体のぐあいを察知できる程に、話し声には実にさまざまな意味伝達の役割りがある。

あいさつのことばを使った音楽の要素の学習として考えられるのは、指導者が簡単なお話を作り、お話の世界であいさつのことばを繰り返して音楽の要素をわからせていく方法である。


次に、予想される幼児の反応を入れて事例を示した。

事例1 「おはようございます」を使った指導

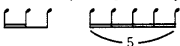
指導者 ①— おはようございます  


幼児 ①— おはよございます  



指導者 ②— あら、元気がいいのね、朝のあいさつは「おはよう」とか「おはようございます」と言いますね。でもね、風邪をひいていて、熱があって、しんどいなあと思う時には、今のみんなのように元気に「おはよございます」で言えるかしら。しんどい時にどんな声で言うと思いますか、今、ああしんどいなあと思いながら朝のあいさつをしてみましょうか。

幼児 ②— おはようございます  


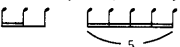
指導者 ③— そうね、しんどいなあという感じが出てましたね。ではね、朝、お蒲団の中で目が覚めたんだけど、横に赤ちゃんがスヤスヤとまだ寝ているの、それで、そっとお蒲団から抜け出て赤ちゃんが起きないように、お母さんにあいさつをすとしたら、どんな風に言うかしら。


幼児 ③— おはようございます  


指導者 ④— そうね、それなら赤ちゃんはまだ寝てるでしょうね。では、お母さんよりもう少し遠くにいるお父さんに言うとしたらどんな声になるかしら、お父さんはお母さんより少しだけ向こうの方にいるのよ。

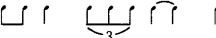
幼児 ④— おはようございます  


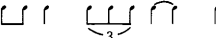
指導者 ⑤— なる程ね、お父さんにも朝のあいさつができましたね。あら、赤ちゃんも目が覚めたみたいよ。ハイハイしてこちらに来たみたいだから、庭にいるおばあさんにも聞こえるようにあいさつをしましょうか。室の外の庭にいるおばあさんに届くような声で言うのよ。

幼児 ⑤— おはようございます 又は  


おはよございます  


指導者 ⑥— それだとおばあさんにも聞こえるでしょうね。それでは、先生がちょっと変わった言いかたをしてみるから、どんな風になっているかわかったら真似してみてくださいね。

おはようございまーす  


幼児 ⑥— おはようございまーす  


指導者 ⑦— あら、大きな声で真似ができましたね。これは、先生だったらこんな風にあいさつしよかな、と思うあいさつでした。次にみんなが最初に元気なあいさつをした時の真似をしてみますね。

幼児期の音楽カリキュラムへの提言

おはようございます  
 ↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑

みんなのに似てたかしら、では、今のに手を叩きながら、もう一度行ってみますね。(○印は手を叩く所)

おはようございます  
 ↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑  
 ○○○○○○○○○

みんなも一緒にしてみましょうか、ね。

おはようございます  
 ↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑  
 ○○○○○○○○○

指導者 —⑧— そうですね、できますね、では、先生が一番最初にみんなにあいさつした時の声で、もう一度同じ声であいさつしてみますね。

おはようございます  
 ↑↑↑    (↑↑↑↑↑↑↑↑)  
           5

先生はこんな風に言いました。では、先生のあいさつに合うように手を叩くと、みんなだったらどんな風にするかしら。

幼 児 —⑨— おはようございます  
 ↑↑↑    (↑↑↑↑↑↑↑↑)  
 ○○○    ○○○ 5 ○○○

指導者 —⑩— そうね、それでもいいわね、みんなはたくさん手を叩いたけど、先生は2つだけ手を叩いて言ってみますよ。

おはようございます  
 ↑↑↑    (↑↑↑↑↑↑↑↑)  
 ○            ○ 5

ほら、ね、こんな風に2つだけ手を叩いて言えるかしら。

幼 児 —⑪— おはようございます  
 ↑↑↑    (↑↑↑↑↑↑↑↑)  
 ○            ○ 5

指導者 —⑫— できたね。おはようございますと2つ手を叩く代わりに、次は、少しむつかしいですよ、1つ膝を叩いてから手を叩きますよ。ほら、こんな風に膝と手を交代に叩きながら「おはようございます おはようございます」と2回繰り返してみましょうね。

指導者 —⑬— ではね、次にあわててあいさつすることってあると思うのね。そうすると、どんな風にみんなは言うかしら。そうね、あわてた言い方をすると早くなりますよね。じゃ、先生が手を叩く音の速さに合わせて言ってみましょうか。そうですね、では、先生が始めに膝を叩いて次に手を叩きますよ、その速さに合わせて言えるかしら。

できましたね、では、思いっきりゆっくり言ってみましょうか。

次は、いつもあいさつする時の早さですよ。

いろいろと速さを変えてみましたね。速かったり遅かったりいろいろな速さがありますね。

前に、赤ちゃんが寝てても目が覚めない位の声であいさつをしましたね。その時は、そっと、やさしい感じの声でしたね。でも、家の外に居るおばあさんに聞こえるような声であいさつをした時は、よく聞こえるようにと大きな声であいさつをしましたね。そしたら、次は、おはようございまーす(◁)という風に、最初は小さな声だけどだんだん大きな声になるように言ってみましょうか。そうですね、みんなの声は小さな木がだんだん大きく育っていくような感じがしますね。そんな感じでもう一度言ってみましょうか。

ではね、次には大きな風船がだんだん小さく萎んでいくような感じで言ってみましょうか、ね、でも、むつかしいかしら。あらあら大きな風船が急に小さな風船になってしまった感じのあいさつでしたね。だんだん小さくなる感じはむつかしいですね。

#### 《事例1についての音楽の要素の解説》

①～④は指導者の語りかけであり、⑤～⑨は幼児の反応の予想である。ここに記述した全ては数日間に分けて指導する内容の全体の流れであって、決して1回の指導で幼児に伝えようとする内容ではない。

##### ①について

大人は「おはようございます」のあいさつを①のように一息に滑らかに話すが、幼児は時として⑤のように、「おはよございます」と一語一語をはっきりと声に出す幼児特有の話し方をすることがあり、特に、多勢で唱和する時に著しい。恐らく、⑤のようにことばを出すのは、幼児が元気に声を出そうとする意識に因ってのことであろう。

##### ②について——音の強弱とリズム・間

⑤のように声を出した幼児でも、音声を弱くした場合には⑥のように声を出す。このように大人と同様なフレーズ感をもつ声の出し方は、幼児にも日常会話のなかに多く見られ、「おはようございます」のことばを1つのグルーピングしたものとして扱った話し方である。

仲間と共に元気に声を揃える時に、必ずしも⑥のように声を出さねばならないと教えるより、幼児が自然に⑤と⑥の差違がわかることが大事であろう。

##### ③について——音の強弱とリズム・間

幼児に音の強弱を知らせるためには、②と③のように実際に声を出してみる経験から会得していく手順があるだろう。幼児が空想の世界で遊びながら、その気持になってことばの表現力の豊かさを味わい、ことばの音の流れとリズム・間に関心をもつことが指導のねらいである。

##### ④について——音の強弱とリズム・間

弱く小さい声と普通の声の出し方には発生する際の心の構えに少なからず差があると思われる。弱く小さい声を出した後で、普通の声を出した時の何かほっとした安堵感があつたなら、弱く小さい声を出す時の緊張感の必要性を意識の中におくことになろう。そして、ことばの流れに伴うリズム・間のニュアンスの違いにわずかでも気付くことになるのではないだろうか。

##### ⑤・⑥について——音の強弱とリズム・間

遠くへ届くような声を出すための大きな声の出し方には、一語一語を明瞭に発音する方法と調子にのったリズムで一気に声に出してしまう方法がある。前者の場合でも、幼児の唱和に見られるような喉に力を入れた発声は、濁り声になりやすく、がなるようになってしまい、喉に負担がかかるので、幼児の発声法としては注意がいるのではないだろうか。後者のような声の出し方が⑤であるが、この場合には、声の大きさが強さを伴った表現手段となる。

##### ⑦・⑧・⑨について——リズム・間

ことばのリズム・間についての意識を、幼児が日常使用することばから明確にすることは、美しい国語を話す基礎となるだろう。

⑤のように幼児がことばに合わせて手を叩く場合、手の叩き方には腕に力が入って力んだようになってしまい、ことばの流れとは合わなくなる。しかし、⑤のように手を叩くと、ことばのアクセントやイントネーションが自然に表現され、きれいなことばになる。



#### ㊦について——リズム・間と音色

手を叩く場合に、円を描くように手を叩くと語調の広がりを感じとりやすく、ことばじりをはっきり発音することができる。さらに、膝と手を叩くことで、「おはよう」と「ございます」の構成をことばのまとまりの流れから理解することができよう。そこから拍の感覚が把握するのではないだろうか。

膝打ちを1拍として手を叩くことを2拍としたなら、2拍子の指揮への導入へも進むことができよう。

膝打ちの音と手を叩く音の2つの音色に合わせて、「おはようございます」を繰り返して声に出しているうちに、ことばとリズム・間の調子に一つのフレーズ感が生じやすくなることもある。そうすれば、ベースに流れる膝打ちの音と手を叩く音の2つの音の響きと幼児達の声の響きが一緒になって、単純な音楽のようにまとまることであろう。

#### ㊦について——速度と強弱の変化と形式

指導者が膝や手を叩くのを見て聴いて、幼児がその速度や強弱の変化に合わせて声を出せるようになったら、幼児は音楽的な表現力であるところの、声の自己コントロールの技術を会得したことになる。

音楽の要素として、ことばのリズム・間、速度、高い声・低い声の音高、声と膝や手を叩く音色、声を強く出したり弱く出したりする強弱の変化を指導者の手を見ながら調節していくならば、「おはようございます」のことばを使うことだけの歌は生まれる。そこに、指導者が、曲のまとめ方を1つの形式として示すことができたなら、“わたしたちの音楽”を創ることが実現する。このような経験を通して、幼児自身が音楽のまとめ方を会得した成果から、幼児だけで創作する“わたしたちの音楽”が生まれてくるであろう。

以上の具体例は、例えば、「おはようございます」のことばを使った場合の、大雑把な1つのめやすとしての記述であり、数日間の指導内容を1つの流れとしてまとめたものである。ある部分は一日で幼児に理解されるかもしれないが、難しいようであれば、わかりやすく説明を加え、繰り返し指導する必要があるだろう。新しい部分を加えながら、おさらいをしながら、幼児に音楽の要素がわかるように進めていくことである。対象児の年齢によってどこまで教えようとするかなどの計らいが必要であり、細部は時に応じて変えるべきである。

なお、このような指導の際には、幼児が想像の世界で遊べるように話しかけ、現実の世界と想像の世界を往き来できるような話術（演技力）が指導者に要求される。

### 3-2 身体を動かす活動

幼児はブランコにのって周期を感じたり、高い所から飛び降りたりしながらジャンプの身体のはずみを感じるなど、身体を動かしながらもリズム感覚は生活のなかで自然に会得しているものである。身体を動かすのが好きな子、好きでない子、好きな子は運動神経がよく発達するかもしれないし、好きでない子は運動神経が鈍いかもしれないが、音楽教育の立場で身体を動かしながら音楽的な能力を引き出し、育てていくことは、聴く音楽がより深くわかるための手助けになりうる。このことは、体育の教科のような運動機能を高める目的とは違い、全身的な運動によって音楽の理解へと繋がるような活動をすることが目的であるため、運動機能の技術の上手・下手は問うものではない。

音楽の要素を全身を使って会得できるような活動内容を計画するには、幼児の日常的な動きのなかから計画に使える動きを探し出さねばならない。そして、どの子でもできそうな歩くこと、走ること、飛ぶことなどの動きを使った活動と音楽教育のねらいが一致する指導へと展開することである。

次に、予想される幼児の反応を入れて事例を示した。

## 事例2 歩くことと八分音符の認識の指導

指導者 ①— これから音楽に合わせて走ってみましょう。(高い音域で八分音符を中心に構成した音楽を流す)

幼児 ①— 各自が思い通りに走りまわる。

指導者 ②— 元気よく走りましたね、そしたら、次は音楽に合わせて歩いてみましょうね。(二分音符を中心に構成した音楽を心もち速く流す)

幼児 ②— 各自が思い通りに歩く。

指導者 ③— そうですね。こんどは元気よく歩きましたね。さっきは走って、こんどは歩きましたね、でも、みんなが動いているのを見てると走っているのかしら、歩いているのかしらと先生には走っているのと歩いている違いがよくわからないですね。こんどは、音楽を良く聴きながら走ってみましょうね。

幼児 ③— 音楽に合わせて走ろうとして走る。

指導者 ④— あらあら、今のは音楽をよく聴きながら走ってましたね。そんな風に、次も音楽を良く聴きながら歩いてみましょう。

幼児 ④— 音楽に合わせて歩く。

指導者 ⑤— そうですね、歩く時も音楽をよく聴きながら歩きましたね。そしたら、みんなはそこへ座って、先生の弾く音楽を聴いて、「あっ、これは走るのにいい音楽だ」とか、「うん、これは歩くのにいい音楽だ」とか試してみようね。(八分音符と二分音符の音楽) どうでしょう、走るときの音楽と歩く時の音楽とちょっと、どっか感じが違うかな、と思った人はいますか。そうですね、ちょっと何か違いますね。そしたら、みんなは「チチチチ……」と言えるかしら、先生がピアノを弾いてみますから、ピアノの音に合わせてチチチチと言って下さい。(八分音符の音楽)

ピアノの音に合わせてチチチチと言えますね。では、みながピアノに合わせてチチチチと言いながら走ってみましょう。

幼児 ⑤— チチチチ……と言いながら走りまわる。

指導者 ⑥— そうです、そうです、チチチチと言いながら走ると、今のようにピアノの音に合わせて走ることができますよ。では、次に弾く音楽はチチチチが似合うかしら、よく耳を澄まして聴いてみてね。(二分音符中心の音楽)

そうですね、あまり似合いませんね、そしたら、次の音楽はどうでしょう。(八分音符中心の音楽)

どうですか。そうですね、こんどはチチチチに似合いますね。では、次の音楽はどうでしょうか。(四分音符中心の音楽)

どうでしょう。そうですね、少し似合うような気がしますね。

じゃ、チチチチと言いながら、チチチチに似合う音楽に合わせて走ってみましょう。(八分音符中心の音楽)

### 《事例2についての音楽の要素の解説》

音楽の要素を理解させる最初は、八分音符と二分音符の比較のように、分割した音符と拡大した音符の音の長さの差を感じ取れるように指導するのが適切と考える。

①について (幼児の八分音符の速度)

音楽に合わせて走ったり歩いたりすることは、誰れにでもできることであるが、多くの場合、

大人でも子どもでも、各自がそれぞれにもっている走り良いリズム・間、歩き良いリズム・間のような直感で動いてしまう。音楽が流れていることを知覚しながら、音楽に合わせてようと意識を向けない限り、各自が自分の動き良いリズム・間が表出してしまう。

幼児が走るリズムを音符と照らし合わせれば、八分音符で速度を調節できる。そこで、指導者がクラス子ども達が走り良い速度を把握するために、自由に走らせてみる。

#### ②について（幼児の歩く速度）

八分音符は走るリズムに適しているが、幼児が走るリズムと歩くリズムの音の保持としての音符の比較は難しい。◇のように、幼児は二分音符の音楽が流れていても、走るような感じで歩いてしまうことであろう。

#### ③・④について（八分音符と二分音符の足の運びの違い）

幼児が音楽に合わせて走ったり歩いたりしようと音楽に耳を傾けることで、足の運び、動き方の違いに気付くことができる。そこで、八分音符の長さに比べて正確な二分音符の長さではなく、少し速めの二分音符の感じの音楽を歩くための音楽として流す。なぜなら、八分音符と四分音符は音の長さが1:2の率であっても、動いている幼児には自分の動きを調節するための聴覚の知覚は、静かに座っている時より鈍くなっていることが多いからである。

八分音符の認識のためには、慣れない始めのうちは八分音符を中心に構成した音楽を高音域で流して、音域の違いの効果を利用すると容易になる。しかし、音の長さと言音の高低は本質的には関係が無いので、便利的に使う音域の効果の利用は適当な時期にやめるのがよい。

#### ⑤・⑥について（八分音符にことばをあてはめて）

八分音符の認識のために二分音符を利用し、音域の効果をも利用したが、ここでは、音符にことばをあてはめて声を出すことと合わせて走る活動をする。

八分音符に適した「チチチチ」の言葉をあてはめることで、実際に動きながらチチチチと声を出す時、足の運びがチチチチの声に合うようになっていく傾向が強い。

以上の具体例は、4才児に4月頃に指導できる内容であろう。小学校入学までの期間に、音の長さの区別（音楽の要素としてのリズム・間）の理解は、音楽の基礎能力として必要である。

事例2に続く音の長さの理解への道筋として、八分音符の次は、長短の音の長さの比較を会得することであろう。例えば、「ケンケンパー」ということばに合てはめて「↓↓」もしくは、「↑↑」の感じ方で動くことである。そして、前後の音の比較をすることで、短い音と長い音の感じ方を身体を使ってわかることであろう。幼児は聴覚で音の長さを知覚できても、わかったつもりだけで、実際には音の響きの対象としての音の長さがはっきり把握していない場合が多い。的確に音の長さを理解することによって、始めて休符の感覚もわかってくるようになる。

聴こえる音と、音と音の間にある感覚を、音の余韻として、また、内的な音として把握することによって、リズム感覚が成熟する。そのためにも、幼児期には全身運動によって音の長さを会得しておく必要がある。

### 3-3 音を聴く活動

幼児は生活のなかにある話し声、歌声、足音、膝を打つ音、洗濯機の作動音、車の音、電話の音、風の音……さまざまな音に興味、関心をもち、好奇心をもって音に注意深くなることが、音楽を学ぼうとする原動力になる。

3才児には3才児の、5才児には5才児の生活があるはずで、個人個人の存在価値や創造しえる感性の働きに目を向けながら、日常性のなかから音楽能力育成のための可能性を支え、伸ばしてやるべきであろう。

川崎には、音楽的にすぐれた能力をもつ幼児を対象とするのではなく、全ての子が集団のなかで歌ったり、音・音楽を聴取したりすることを通して、音楽活動に対する興味と喜びを引き出すことのできる一連の実践研究がある<sup>4)</sup>。音を聴く活動のカリキュラムを構成するには、一連の川崎の研究報告や、ジョン・ペインターとピーター・アストン共著「音楽を語るもの」<sup>5)</sup>などが参考になるだろう。

次に、予想される幼児の反応を入れて事例を示した。

### 事例3 材質と型の大小による音の違いを利用した指導

指導者 —①— よく雨が降りますね。あれっ、あれは何の音かしら。

幼 児 —◇— 雨が窓に当たる音。木が揺れる音。

指導者 —②— そうですね。今日は風が強いから、雨が窓に当たるとこんな音がするのね。それに、雨と風が木に当たっても音がするのね。この前、みんなに雨が空から降って来ると雨はどこへ行くのかしら、と聞いたら、川やプールや傘の上とかいろいろ教えてくれましたね。海へいくと教えてくれた人もいましたね。その時、海の水がまた空へ行って雲になって雨になって、とか話しましたね。雨が降っているのは見てわかるけど、音を聴いてもわかりますね。

今日はね、みんなに音を聴いてもらいますよ。先生がうしろを向いて音を出しますから、何の音かしら、と聴いて、当てて下さいね。(木の鈴を鳴らす) わかりましたか。

幼 児 —◇— 木の音

指導者 —③— そうです、木の音ですね。次は何かしら。(ガラスの鈴を鳴らす)

幼 児 —◇— ガラスの音

指導者 —④— そうです。ガラスの音ですね。次は何かしら。(幼稚園で使っている鈴を鳴らす)

幼 児 —◇— 鈴

指導者 —⑤— そうです、鈴です、みんながよく使う鈴でした。では、次は何かしら。(土の鈴を鳴らす)

さあどうですか、何の音がわかりますか。

実はね、土で作った鈴なの。ほら、これですよ。土で作った鈴を鳴らしました。さっきの音は、木で作った鈴とガラスで作った鈴を鳴らしたのよ。まだありますよ、これは、銅で作った鈴で、こんな音がします。これはカネ(合金)で作った鈴で、こんな音がします。

いろいろな鈴が並びましたね。どれも鈴ですよ、でも、みんな違う音がします。さてさて、これも土で作った鈴です、ほら、この鈴と同じですね。でも、どこか違いますね。(同じ型の大小の土鈴を並べる) わかりますか。

幼 児 —◇— 大きい鈴と小さい鈴

指導者 —⑥— そうです。大きい鈴と小さい鈴です。どちらも土で作った鈴ですよ。だけど、こちらの大きい鈴はこんな音がします。そして、この小さい鈴はこんな音がします。2つの音は同じ音ですか、どうでしょう。

そうね、違う音がしますね。そしたら、ほらほら、もう1つ土の鈴が出てきました。この鈴の音はこんな音です。3つ並べて順番に音を出したら、3つとも違う音がしますね。どうしてかしら。そうです、大きさが違いますから、音が違うんです。

ここにたくさん並んだ鈴はみんな違う音がしますね。ほかに、例えば、神社へ行くと大きな鈴が有って、紐がついているのを見たことが有りますか。紐を引っぱると、ガラガラと鳴ったりします。あら、鈴を鳴らしたことがある人もいますよ。いろいろな鈴があるもんですね。

では、この鈴を使って歌を歌いましょうか。みんなが知っている歌で、『みんなおともだち』を歌ってみましょう。では、9人の人に鈴を鳴らしてもらいますよ。(全員がどれかの鈴を鳴らせるまで歌うことを繰り返す)

さあ、いいですか、鈴を持った人は『みんなおともだち』の歌が始まる前の音楽の所に先生が合図をしたら、自由に鳴らしていいですからね。でも、歌が始まったら、鈴の音を出さないでね。

⋮ (9個の鈴を使用する)

9つの音が一緒に鳴ると、ずいぶん賑やかですね。だから、土の鈴だけでしてみましょうか。(2～3回繰り返す)

⋮ (3個の土鈴を使用する)

次は、始めに1人の人が大きな土の鈴を鳴らして、その人は歌が始まるまでずっと鳴らしているのです。中位の土の鈴を持った人は先生が合図したら鳴らし始めて、歌が始まるまで鳴らしています。小さな土の鈴を持った人は次の先生の合図で鳴らし始めて、歌が始まるまで鳴らしています。歌が始まったら、鈴を持った人は音を出さないで下さいね。

### 《事例3についての音楽の要素の解説》

日本の文化は季節・自然と密着し、自然と共存共栄してきた伝統がある。人が暮らしのなかにある音に気付くのは、どんな時であろうか。いずれにしても、幼児が音・音楽に耳を傾けることができるような習慣を身に付けることは、音楽を理解したり演奏したりする力の根源であろう。

#### ①～⑤について (音色)

幼児は幼稚園で神楽鈴のように多く集まった鈴を使っているので、1個で鳴らす鈴は鈴のイメージと離れていたかもしれない。このことは、木の鈴やガラスの鈴の音を聴いてその材質で答えたことから推測できよう。幼児には幼稚園で使う鈴は知っているが、木で作った鈴の音は同時に多くの音が出ていないし、音色も金属性の音ではないことから、似たものとして推し量ることができないのであろう。そこで、幼児なりの知識から推量して、わかった鈴の材質についてのみ答えたのであろう。

#### ⑥について (音色、音高、音量)

土鈴は、著者が備前焼きのように焼き締めの手法で制作したもので、硬質である。似た型にしてあるが、大きさが三通りなので音の高さがそれぞれに違う。3個の土鈴から、幼児に音の出る器の大きさが違うと音の高低の違いがあることを理解させる。

落とせば割れるものであるが故に、幼児なりに慎重に扱うことにもなり、始めて見る鈴への好奇心と早く音を出したい気持から、指導者の前奏を良く聴き、合図を待つ姿には緊張感がある。

全員が一通り全ての鈴で音を出してから、3個の土鈴で音質を揃えて音を出す。このことは、7種の9個の音の場合と1種の3個の音の場合を幼児が音を出したり、仲間の音を聴いたりしながら比較させる。

そして、3個の音を同時に出す場合と、1個、2個、3個と音が重なって音を出す場合の比較もさせる。このことは、音量に対して感じる心を育てる。

3-1、3-2、3-3は大雑把な音楽カリキュラムの筋であり、日案、週案、月案という考え方にはあてはまらない。しかし、教えられる側の幼児と教える側の指導者との関係で、長期的な音楽教育の指導内容の流れを計画するには役立つ音楽カリキュラムの例であろう。今、幼児

に音楽の何をわからせようとするのか、ということから音楽教材（歌など）を選曲すべきである。

幼児に耳をひらき心をひらく音楽教育をするのは、音楽をする喜び、音楽を見聴きする喜びが音楽を好きになることに繋がるからである。音楽が好きになれば、自ら積極的に音楽しようとする心構えが生まれ、自ら多くの音楽に親しんでゆくであろう。

## おわりに

音楽は、かならずしも「音楽」として整っていないでも通じる場合がある。例えば、幼児のひとりごとのように、自分だけの意味しかなかったりして内面世界に濃いかかわりを持って、自然発声的に遊び的に表現された音楽のようなものである。このような場合には、いわゆる「音楽」になっていなくとも、やっぱり音楽だ、と聴く人の心に感じ入らせる場合がある。幼児期の音楽教育に携わる人は、音楽についての学識と同時に、幼児の精神的な発達過程での幼児なりの知的な意識と努力について、正しい理解をもつことが必要と考える。

幼児期の音楽教育に携わる人には、一般的に音楽と認められている音楽に至るまでの、幼児の心に芽ばえただけのような音楽をもわかってあげようとする心を持つことが、幼児の音楽的な能力を引き出す指導へ繋がるという認識があって然るべしであろう。大人が過剰にかかわり、指図し、考えを押し付ける過干渉のような指導は避け、幼児が自分の意志で何かをする喜びを知り、遊びの心や冒険心を体験できるようにすべきである。

幼児が自主的に主体性をもって真の自分（例えば、自分の音楽）を確立していけるように準備してあげることが、幼児期の教育の原点であろう。

## 引用文献

- 3) 三善 晃「現代の芸術視座」音楽芸術9月号 音楽の友社 1988年

## 参考文献

- 1) 小泉文夫「小泉文夫の民族音楽」放送大学教育振興会 1985年
- 2) 梅棹忠夫「民族学入門」社会と文化 朝日新聞社 1977年
- 4) 川崎智子「音楽リズムの領域からみた音楽物語へのかかわり方に関する研究Ⅳ」保育学会 第37回大会研究論文集 1984年  
川崎智子「音楽リズムの領域からみた音楽物語へのかかわり方に関する研究Ⅴ」保育学会 第38回大会研究論文集 1985年  
川崎智子「幼児期における音楽活動の実践的研究」保育学会 第39回大会研究論文集 1986年  
川崎智子「音楽活動と他領域の活動との関わりについてⅡ」保育学会 第41回大会 1988年
- 5) ジョン・ペインター、ピーター・アストン「音楽を語るもの」音楽の友社 1982年
- 6) 波多野諠余夫、稲垣佳世子「知的好奇心」中央公論社 1973年
- 7) 波多野諠余夫、稲垣佳世子「知力の発達——乳幼児から老年まで——」岩波書店 1977年